



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

上智大学通信

編集・発行
上智学院総務局広報グループ
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1
電話：03-3238-3179 FAX：03-3238-3539
www.sophia.ac.jp
[Facebook] www.facebook.com/SophiaUniversity
[Twitter] @SophiaUniv_JP

第440号 2019年(令和元年)12月23日発行

教皇フランシスコ来校

「叡智の座の大学」で学ぶ者へ 弱者を擁護し公正で誠実な人に

11月26日、教皇フランシスコが四谷キャンパスを訪れた。教皇フランシスコは、本学の設立母体であるカトリック修道会・イエズス会出身の初の教皇。本学への教皇の訪問は、1981年の聖ヨハネ・パウロ2世教皇以来、38年ぶりである。2017年12月18日には、映像回線を通じた企画「教皇フランシスコと話をしよう」において、教皇は本学学生たちと対話をした。11月23日に来日し、長崎と広島を訪問した教皇は、日本滞在最終日の26日に本学を訪れ、6号館101教室で学生・教職員に向けて、メッセージを送った。

会場は約700人の学空の鳥に続き、来場者手に包まれた。生・教職員で満席となった。全員が「あなたの平和 冒頭、佐久間勤理事長が「聖歌隊によるカトリックの」を歌う中、教皇が入場した。聖歌隊によるカトリックの」を歌う中、教皇が入場した。聖歌隊によるカトリックの」を歌う中、教皇が入場した。聖歌隊によるカトリックの」を歌う中、教皇が入場した。

イエズス会により創立された大学として、今日、ともに時間を過ごしてここに教皇陛下がいらしてください。心より感謝申し上げます」と歓迎の挨拶を述べた。

「弱者を擁護し、公正で誠実な人になってほしい」「貧しい人たちのことを忘れてはならない」「めいめいが与えられた分野で奉仕してほしい」と語りかけた。

その後、暁道佳明学長とカトリック学生の会会長の鈴木隆典さん(神学3)から、記念品として「子安観音像」を長崎の祈りを「教皇のために」と、盛大な拍手の中、教皇は舞台から客席に移動した。学生たちが寄せ書きした布を受け取り、笑顔で写真撮影に応じた。その後、車内から学生に手を振りながら帰途に就いた。メインストリートには、見送りのために集まった多くの学生が、バチカンの国旗を振り、歓声を上げながら教皇を見送った。

記念品を贈呈した鈴木隆典さんは、講話後に行われた記者会見の中で、「在学中に教皇の講話を直接聴くことができ、大変幸せです。講話の中にあったように、今後は、世の中で弱い立場にある人とともに生き、キリスト教ヒューマニズムの中に生きることを実践していきたい」と語った。



教皇フランシスコが6号館101教室で学生・教職員に直接語りかけた。同時中継会場でも多くの学生が教皇の言葉に耳を傾けた。



教皇を迎えメインストリートで歓声を上げる学生たち。



佐久間勤理事長が教皇に歓迎の挨拶を述べた。



教皇の講話に聞き入る約700人の聴衆 © VATICAN MEDIA



学生・教職員に向けてメッセージを送った。



教皇から授与されたレリーフとともに記念撮影。



盛大な拍手の中、教皇は学生と握手しながら退場した。



神学部学生の寄せ書きを手笑顔の教皇 © VATICAN MEDIA



手作りの看板を掲げ教皇を見送る学生たち。

マ教皇と上智大学」で展示されている聖ヨハネ・パウロ2世教皇とヨゼフ・ピタウ学長(当時)を描いた絵画や、本学創立100周年の際に自身が贈った祝福状などを見て回った。

最後に、教皇は四谷キャンパスのメインストリートへと移動し、神学部の学生たちが寄せ書きした布を受け取り、笑顔で写真撮影に応じた。その後、車内から学生に手を振りながら帰途に就いた。メインストリートには、見送りのために集まった多くの学生が、バチカンの国旗を振り、歓声を上げながら教皇を見送った。

記念品を贈呈した鈴木隆典さんは、講話後に行われた記者会見の中で、「在学中に教皇の講話を直接聴くことができ、大変幸せです。講話の中にあったように、今後は、世の中で弱い立場にある人とともに生き、キリスト教ヒューマニズムの中に生きることを実践していきたい」と語った。

教皇の講話は、10号館講堂などで同時中継されたほか、8号館ビロティなどのパブリックビューイングや、YouTube Liveによる中継も行った。

※教皇の講話(全文)は2面に掲載。

※本学公式 YouTube チャンネルで動画配信中

愛する兄弟姉妹の皆さん。

わたしの教皇としての日本司牧訪問の最後に、貴国を発ってローマに戻る前の少しの時間を皆さんとともに過ごせることを大変うれしく思います。

この国での滞在は短いものでしたが、大変密度の濃いものでした。神と、日本のすべての人々に、この国を訪れる機会をいただいたことを感謝します。日本は、聖フランシスコ・ザビエルの人生に多大な影響を与えた国であり、多くの殉教者がキリスト教信仰をあかしした国です。キリスト教信者は少数派ですが、存在感があります。わたし自身、カトリック教会に対して一般市民がもつ好意的評価を目にしましたが、こうした互いの敬意が、将来において深まっていくことを期待します。また、日本社会は効率性と秩序によって特徴づけられていますが、一方で、何かそれ以上のものを望み、探しているように見受けられます。よりいっそう人間らしく、もっと思いやりのある、もっといっそうに満ちた社会を創り出したいという熱い望みを感じます。

学問と思索は、すべての文化にあるものですが、皆さんの日本文化はこの点において、長い歴史にはぐくまれた豊かな遺産として誇るべきものです。日本はアジア全体としての思想とさまざまな宗教を融合し、独自の明確なアイデンティティをもつ文化を創り出すことができました。聖フランシスコ・ザビエルが深く感銘を受けた足利学校は、さまざまな見聞から得られる知識を吸収し伝播するという日本文化の力を示す好例です。学問、思索、研究にあたる教育機関は、現代文化においても重要な役割を果たし続けています。それゆえ、よりよい未来のために、その自主性と自由を保ち続けることが必要です。大学が未来の指導者を教育する中心的な場であり続けるとしたら、そこでは、及ぶかぎり広い範囲における知識と文化が、教育機関のあらゆる側面が、いっそう包摂的で、機会と社会進出の可能性を創出するものになるような着想を与えるものでなければなりません。

ソフィア（上智）。人間は自らの資質を建設的かつ効率的に管理するために、真のソフィア、真の叡智なるものをつねに必要としてきました。あまりにも競争と技術革新に方向づけられた社会において、この大学は単に知的教育の場であるだけでなく、よりよい社会と希望にあふれた未来を形成していくための場となるべきです。そして、回勅『ラウダート・シ』の精神で、自然への愛についても加えたいと思います。自然への愛は、アジアの文化に特徴的なものです。ここに、わたしたちの共通の家である地球の保護に向けられる、知的かつ先見的な懸念を表現すべきでしょう。その懸念は、技術主義（テクノクラティックパラダイム）の一部である還元主義的な企て全体を掘り下げ、疑問視できる、新たなエピステーメーの促進と結びつきうるものです（同106-114参照）。見失わないでください。

「真正な人間性は、閉じた扉の下からそっと入り込む霧のようにほとんど気づかれぬながらも、新たな総合へと招きつつ、テクノロジー文化のただ中に住まっているようです。真正なものの粘り強い抵抗が生まれるのですから、いろいろなことがあったとしても、期待し続けることはできるのではないのでしょうか」（同112）。

上智大学はつねにヒューマンズ的、キリスト教的、国際的というアイデンティティによって知られてきました。創立当初から、さまざまな国の出身の教師の存在によって豊かにされてきました。時には対立関係にある国々からの出身者さえいました。しかしながら、すべての教師たちが、日本の若者たちに最高のものを与えたいという願いによって結ばれていたのです。まさにこれと同じ精神が、皆さんが日本と国外で、もっ



教皇フランシスコからのメッセージ(全文)

とも困っている人々を支援しているさまざまなかたちの中に脈々と続いています。皆さんの大学のアイデンティティのこのような側面がいっそう強化され、今日のテクノロジーの大いなる進歩が、より人間的かつより公正で、環境に責任ある教育に役立つものとなると確信しています。上智大学が礎を置く聖イグナチオの伝統に基づき、教員と学生が等しく思索と識別の力を深めていく環境を作り出すよう、推進していかねばなりません。この大学の学生の中に、何が最善なのかということ意識的に理解したうえで、責任をもって自由に選択するすべを習得せずに卒業する人がいてはなりません。それぞれの状況において、たとえそれがどんなに複雑なものであったとしても、己の行動においては、公正で人間的であり、手本となるような責任あることに興味をもつ者となってください。そして、決然と弱者を擁護する者と、ことばと行動が偽りや欺

瞞であることが少なくないこの時代において、まさに必要とされるそうした誠実さにおいて知られる者となってください。

イエズス会が計画した「使徒の世界的優先課題」は、若者に寄り添うことが、世界中で重要な現実であることを明確にし、イエズス会のすべての教育機関が、こうした同伴を促進すべきとしています。若者をテーマとしたシノドス（世界代表司教会議）と関連文書が示しているように、教会全体が、世界中の若者たちを、希望と関心をもって見つめています。皆さんの大学全体で、若者たちが単に準備された教育の受け手となるのではなく、若者たち自身もその教育の一翼を担い、自分たちのアイデアを提供し、未来のための展望や希望を分かち合うことに注力すべきです。皆さんの大学が、このような相互のやり取りのモデルを示し、そこから生み出される豊かさや活力によって知られる存在となりますように。

上智大学のキリスト教とヒューマンズの伝統は、すでに述べたもう一つの優先事項と完全に一致します。すなわち、現代世界において貧しい人や隅に追いやられた人とともに歩むことです。自らの使命に基軸を置く上智大学は、社会的にも文化的にも異なると考えられているものをつなぎ合わせる場となることにつねに開かれているべきです。そうすれば、格差を縮め、隔たりを減らすことに寄与する教育スタイルを推進しうる状況を追いつつ、隅に追いやられた人々が大学のカリキュラムに創造的に巻き込まれ、組み入れられるでしょう。良質な大学での勉学は、ごく少数の人の特権とされるのではなく、公正と共通善に奉仕する者という自覚がそこに伴われるべきです。それは、各自が動くよう課された分野で、めいめいが果たす奉仕なのです。わたしたち全員にとっての大義であり、ペトロがパウロに与えた今日でも明白な助言です。「貧しい人たちのことを忘れてはいけません」（ガラテヤ2・10参照）。

上智大学の愛する若者、愛する教員、愛する職員の皆さん。このようなわたしの考えと、今日のわたしたちの集いが、皆さんの人生とこの学びやの今後において実を結びますように。主なる神とその教会は、皆さんが神の叡智を求め、見だし、広め、今日の社会に喜びと希望をもたらす、その使命に加わるよう期待しています。どうぞ、わたしのため、そしてわたしたちの助けを必要としているすべての人のために、祈ることを忘れないでください。

最後に、いよいよこうして日本を離れるに際し、皆さんに感謝します。そして皆さんを通して、すべての日本人に、わたしの訪問中にくださった心のこもった温かい歓迎に感謝いたします。わたしの胸の中に、祈りの中に、皆さんがおられることを約束します。

教皇フランシスコ講話日本語訳文 © カトリック中央協議会

教皇に託されたもの、上智大学の存在意義

上智大学長 曄道 佳明



教皇フランシスコの訪日を世界が注目する中、私たち上智大学はキャンパスに教皇をお迎えしました。この歴史的イベントに立ち会う栄誉に与った私たちは、教皇の託されたメッセージを、そしてその感動を多くの人に伝える責務があると自覚すべきでしょう。

教皇の上智大学構成員への呼びかけは、取り巻く環境の変化に日々奔走する私たちの心を大いに揺さぶるものであったことは言うまでもありません。私がまず感銘を受けたことは、教皇のスピーチが、アジアに向けて、日本に向けて、そして何よりも上智大学に向けて準備いただいたものであったということです。私たちの文化的な背景に言及され、その特性を指摘されて、文字通り私たちにスピーチの対象としての当事者であることを自覚させてくださいました。そして日本という国において、上智大学がそのアイデンティティを発揮することに高い期待を示してくださったのです。その上で、現在世界が置かれた状況への貢献を呼びかけられました。弱者への寄り添い、環境への配慮に代表される地球規模の課題解決に向けて、私たちの存在意義をお示しくさせていただきました。

教皇の存在感を目の当たりにし、お話を傾聴する機会を得た私たちには二つの起こすべき行動があると思います。一つは、教皇が示されたあるべき社会の姿を、まずこの上智大学のキャンパスに実現することです。弱者への寄り添い、環境への配慮など、まず私たちのキャンパスで表現してみることが重要ではないでしょうか。また、学生が教育の一翼を担うことも促されました。学生が主体的に学び、教育の有り様にも積極的にアイデアを出す、そんなキャンパス風土こそが、前述の課題解決に向けた若い力の発揮につながるとお考えになられたのだと思います。

今一つは、教皇のメッセージを受けた私たちの取組みを世界に発信していくことです。私たちは、イエズス会大学として、揺るぎない建学の理念、教育精神を有しています。教育、研究の取組みの多くは、この理念、精神の具現化に方向付けられています。これらを世界に発信し、共有することは、私たちの存在の大きな意義であると思います。

教皇をお迎えした大学として、上智大学は、そのキャンパス環境も、教育・研究の成果も、正しい社会の実現に向けて世に問い続ける存在となりましょう。そのことこそが、過密なスケジュールの中でお立ち寄りくださった教皇への感謝の気持ちの証になると思うのです。

教皇メッセージに答えて

上智学院理事長 佐久間 勤



教皇フランシスコが来校されるという喜ばしいできごとで恵まれたことを感謝するとともに、「叡智の座の大学で学ぶ学生に」くださった教皇のメッセージをおして、学生のみならず学院とその学校全体にとっても力強い励ましをいただいたと感じます。人々との直接の出会いを大切にする教皇は出身修道会であるイエズス会の学校を訪問することを望まれ、聖フランシスコ・ザビエルに遡る上智の建学の精神を、現代という時代状況にふさわしく生かす上で最優先されるべき点について、示唆を与えてくださいました。上智大学という場で語られた教皇のメッセージですが、学院のすべての教育機関にとっても深く心にとめるべき内容もっています。

教皇のメッセージには、イエズス会学校の教育が目指すところが鮮明に描き出されています。社会をより人間的なものとするために積極的に貢献する「イグナチオ的リーダーシップ」を身につけて卒業するように、とくに地球に配慮し貧しい人々の高等教育機会を確保する「いっそう包摂的」な社会を思い描けるように、教育機関のあらゆる側面がそのような「着想を与える」ものであるべき、というビジョンが提示されています。しかもそれが「キリスト教的、国際的」という上智大学のアイデンティティに基づくビジョンであることを確認して、「皆さんの大学のアイデンティティのこのような側面がいっそう強化され、今日のテクノロジーの大いなる進歩が、より人間的かつより公正で、環境に責任ある教育に役立つものとなると確信しています」と言われています。未来を創る若者とりわけ経済的困難という問題を抱える地域の若者への支援、地球環境の問題を引き起こす不公正な社会構造への取り組み、どのような生命もふさわしく尊重される社会・文化形成のための技術的、倫理的、宗教的研究など、全世界のイエズス会学校をはじめとする諸教育機関と協働することが上智に期待されています。

卒業生への期待は、「識別」を身につけることです。「何が最善なのかということ意識的に理解した上で、責任をもって自由に選択するすべを習得せずに卒業する人がいてはなりません」。「卒業生」の重要性については、上智大学が評価されるべき尺度が「他者のために、他者と共に生きる」卒業生を輩出しているかどうかであると、本年7月に来校されたイエズス会総長アルトゥーロ・ソーサ神父も述べています。上智の精神にふさわしい卒業生を世に送り出すという目標に基づく教育・研究・社会貢献の活動を整備することが、教皇フランシスコの励ましへのふさわしい応答です。